

栄山寺の カエル 寺子屋へ 行く



川村 優理

挿絵 川村 明日香

「こちらは新しくできた、寺子屋。えーっと、荀新舎（じゅんしんしゃ）というところでしょうか。」

唐橋通りの西方寺の境内にある寺子屋に小さなカエルがやってきました。

カエルは、丸いめがねをかけ、唐草模様のふろしきを背負っています。細い木の枝を杖にして、やっこのことで、西方寺までたどりついたように見えました。

カエルに最初に気が付いたのは、ちょうど手習いの練習をしていた質屋のまりちゃんです。墨をするための水差しの水を二滴、三滴。疲れてひからびてしまいそうなカエルの頭に落としてやりました。

「ありがとうございます。」

カエルは、ひっく、と一つしゃっくりをしてから、おじきをしました。

「わたくしは、小野のカエルと申します。このお寺のそばを流れる吉野川のずっと川上、栄山寺の鐘の下の池に住んでいます。なんでも、有名な偉い先生が村の寺子屋にやってこられ、荀新舎という立派な名前を付けられたと聞き、それが、わが住まい、栄山寺の横を流れて行く吉野川の川沿いのお寺にあると知りまして、わたくしも、ぜひ学ばせていただきます」と、川を行くイカダのはしっこに飛びのって、ここにたどりつきました。」

「そんな苦労してやって来なくても、カエルだったら。のんきに、池で暮らしてればいいだろうに。」

ちようちん屋の吉之助が、机にほおづえをついて言いました。

「しゃれた名前をつけてもらったけど、やってることは、普通の寺子屋と変わりないんだよ。」

「わたくしは、新しい学問を学んで、りっぱなカエルになりたいと思ひまして。」

「たしかに、めがねをかけたカエルなんて、見たことねえよなあ。」

絵が得意な吉之助は、手習いの紙に、カエルの絵を描きました。

「こりゃあ、わたくしの顔でござりまする。池の水に写した姿より、似ております。」

感心しているカエルを、先生が、手のひらにのせて、顔を近づけました。

「カエルのような小さな生き物も、みな平等に学ぶべきである。」

カエルは、背中をびっと伸ばしました。

「小野のカエルと申します。わたくしの住む栄山寺の鐘には、小野東風の書いた文字が刻まれています。東風どのは、書道の名人でありましたが、あるとき、書道の練習を続けることがいやになり、川に筆を投げ捨てようとなさった。しかし、川べりで、わたくしどもの先祖である初代の小野のカエルが、柳の枝に飛びつこうと、繰り返し、繰り返し、がんばっておったのを見て、あのカエルのように努力を惜しまず学ぼうと思われました。結果、東風どのは、書の名人として名をあげ、わたくしの先祖のカエルも、有名になりました。以来、わたくしの家系は、小野道風どのはとの交流を大切にするため、小野のカエルと名のり、勉学にはげんでおります。」

「栄山寺の鐘にある、東風の文字は、たしかにすばらしい。」

先生は、カエルを、小さい机の上に下ろしました。

「よろしい。では君は、この机で勉強しなさい。」

カエルは、はい、とうなずくと、ふろしきの包みを開いて、自分の筆を取り出しました。「これは、じいさまが、道に落ちていた馬のしっぽの毛を拾い集め、細い竹にそれを結びつけて作ってくれたわたくしの筆です。あ、一緒に包みであるミミズは、弁当です。」

先生は、カエルに手本を書いて見せました。

――小野カエル――

「まずは、自分の名前の練習から。」

カエルの手習いは、なかなか上手でした。

まりちゃんは、新しい友達がやって来てうれしかったのですが、ちょっと気になったので尋ねてみました。

「ときに、カエルさん。どうやって、栄山寺の池にもどるの？川を上るイカダがつごうよく通っていけばいいんだけど。」

カエルは、持っていた筆をぼとりと落としました。

「わたくし、帰ることを、すっかり忘れておりました。」

「おいらが、送って行くっていうには、栄山寺は、ちょっと遠いしなあ。」

吉之助も、栄山寺までは、まだ行ったことがありません。

思えば、ここに来るのも、たいへんな道のりでした。なんとか飛び乗ったものの、イカダは、必死でしがみついているなんては、すべり落ちてしまいます。川の波は荒いし、風は冷たい。途中で鳥にもねらわれます。お寺の屋根が見えてきたので、川飛び込んで、川岸まで泳ごうとしましたが、水は思ったよりずっと深く、流れている木切れにつかまり、なんとか一命を取り止めたのでした。

「ならば、カエルさんが毎日ここにやって来るといのは、むずかしいなあ。」

先生は、うーんと、腕を組みましたが、

「なあに、勉強ならば、家でもできる。それでは、家でまず、本を読みなさい。私が翻訳した「エソツプ物語」を貸してあげよう。これは、動物たちが出て来る本でな、中にはカエルの話もある。きつとおもしろく読めるだろう。今は、この続きを書いているところだよ。次ができたら、また読ませてあげよう。」

差し出された一冊の本を、小野のカエルは、本を両手でうけとりました。

「先生は、福沢諭吉というお名前なのですね。えらい方だと、うわさに聞いています。大切な本を汚さないように、書き写し、一生懸命読ませていただきます。」

「せっかく、ここまで来たのに、残念だね、カエル。」

吉之助のことに、泣きそうになりながら、カエルは、本を風呂敷につつましました。そうして、後ろをふり返り、ふり返り、先生の馬で、家に送られて行ったのでした。

しばらくして――

まりちゃんと吉之助が旬新舎に行くと、福沢先生が、にこにこして言いました。

「『エソツプ物語』のほんやくの続きが、ついに完成したのだ。それにな、カエルを送って栄山寺の池に行くときに、カエルから教わった話も入れておいた。いやはや、おもしろい話でな。そのところを読んであげるから、聞きなさい。」

先生は、えへんとせきばらいをしてから、大きな声で本を読んでもくれました。

「カエルたち、住まいする池のほとりに、大勢の子供来たりて、池の中に石を投げ入れぬ。池のカエルたち、今にも、命、危うしと思いが、その中に一匹、勇敢なカエルがあり、水の面（おもて）に顔を出し、子供たちに向けて、声高らかに言う。「なんじ、悪事を働く。物事の道理を勤勉したまえ。」と――

「どうだ。いい話だろう。」

先生は、得意そうなのですが・・・

まりちゃんは、こっそり吉之助に言いました。

「ちょっとつままないよね。」

吉之助は、栄山寺の池に行つて、石を投げれば、カエルさんが出て来るかなど、思いました。

また数日たって。

ほんやくした「えそつぷ物語」の評判がとてもいいということで、福沢先生は、東京に行くことになりました。

「カエルさんには悪いが、あいさつしていく間がないなあ。おまえたち、よろしく言っ
てくれ。」

福沢先生は、呼びにきたおさむらいといっしょに、足早に、匂新舎を出て行ってしまいま
した。

「あれ、寺子屋の先生がいらないんじゃ、どうしようもねえなあ。」

「代わりの先生が来るまで、つまらないね。」

まりちゃんは、手習いの紙に、カエルのための歌を作ってみました。

題名は、「カエル 帰る」と言います。

カエル 帰る

カエル かえる

どこに帰る？

カエル 池に 帰る

カエル かえる

どこに帰る？

カエル 小川に 帰る

カエル かえる

どこに帰る？

カエル 山に 帰る

カエル かえる

どこに帰る？

カエル おうちに 帰る

カエル かえる どこに帰る？

カエル ここに 帰る

「それ、おもしろい歌じゃないか。」

寺子屋の戸口をがらりと開けて、次の先生が入ってきました。

「森本と言います。こちらは、小野くん。」

新しい先生が、着物のふところから出してきたのは、あの、カエルです。

「ただいま、カエル、帰ってきました」

今度寺子屋にやって来た森本先生が、栄山寺までカエルを迎えてに来てくれて、西方寺の
池に下宿して、匂新舎でみんなと勉強することになったのだと、カエルは、早口で説明しま
した。

「これは、おみやげです。」

カエルはふろしき包みをほどいて、二人と森本先生に一匹ずつ、本日の弁当のミミズをく
れたのでした。

おしまい

平成三十年一月十七日

